

元気っこFORUMによせて



服部 祥子 (はっとり さちこ)

1940年生まれ。岡山大学医学部を卒業。大阪府中央児童相談所判定課医師、大阪府南保健所主査、大阪市立小児保健センター神経科医長、大阪府立公衆衛生研究所児童精神衛生課長、大阪教育大学教育学部助教授、大阪府立看護大学看護学部教授等を経て2001年より大阪人間科学大学教授。専攻は精神医学。

著書に

「人を育む人間関係論—援助専門職者として、個人として」

「生涯人間発達論—人間への深い理解と愛情を育むために」

「親と子—アメリカ・ソ連・日本—」

「乳幼児の心身発達と環境—大阪レポートと精神医学的視点」ほか多数。

(ニッセイ財団選考委員)

「感じる心」が教育の原点

夜の間に浮かぶホタルの幻想的な光の乱舞、樹液に集まるクワガタのカサコソ動かすかな音、勢いよく伸びる夏草のむせかえる匂い、野イチゴの甘酸っぱい素朴な味、頬をかすめて通る風のそよぎ…視・聴・嗅・味・触覚(五感)をごく自然に作動させつつ、空や海や山や川の生きとし生けるものたちの存在を生き生きと実感する時、子どもたちはどんなにさまざまな驚き、不思議、感嘆を感じたことでしょうか。ニッセイ財団の助成を受けて活動したり一ダの報告や参加者の感想文を読みながら、その姿が目につかぶようでうれしくなりました。子どもたちは出会ったことのひとつひとつをその子にしかない感じ方で体験します。それは知識や知恵を生み出す種子を育む土壌なのです。なぜなら新しいものの、未知なるものに触れ、さまざまな感情がよびさまされると、そこからその対象となるものをもっとよく知りたと思うようになるからです。知識をうのみにさせるより、子どもが真に知りたがる道を切り拓いてやることこそが、教育の原点でしょう。



「人とともにあることの 味わいを体験するとうとさ」

お祭にお揃いの半天を着て、ラッセラー、ラッセラーとかけ声を張りあげてはねる子どもたち。年かさの子は少しおませに年下の子を引っ張り、それを大人たちがやんやの喝采で迎え、皆興奮のつぼ。大人に手ほどきされて見たこともない石うすでソバや小麦の原粒を挽いたり、手製の和紙づくりに挑戦した子どもは、昔の人の労苦にため息をつきながら、知恵の深さに感激もしたことでしょう。身体や言葉等に不自由のある人たちと音楽や踊りや

種々の活動を体験した子どもは、知り合う前とは全くちがう感想を相手に抱いたにちがいません。年上や年下、若者や老人、男や女、外国から来た人やハンディキャップのある人等々…。この世にはさまざまな人がそれぞれに日々を大切に生きています。そのことを理屈ではなくごく自然に体験し、人とともにあることの味わいを幼き日より生活の中にとり入れておくことは、真の社会性を素朴に培っていく上の土台になるはずで。



親も子どもともに育つ —新しいチャレンジを

現代の子どもをめぐる状況は、「不登校」「いじめ」「児童虐待」等の増加に象徴されるように危機的な側面をはらんでいます。自然体験やさまざまな世代との触れ合いの経験が不足している世代が親世代になってきているといわれ、子育てへの不安や悩みをもったり、孤立して追いつめられ虐待に至るケースも珍しくありません。しかもこれは親を責めることで解決のつく問題ではないのです。誰も最初から完全な親ではなく、子育ての体験を通して親としてまた人間としてより豊かな成熟への道を迎えるものなのです。そのためには「孤立と不安の子育て」から、「安心と協同の子育て」へと転換する必要があります。これにはなかなか知恵が要りますが、子育て真っ最中の親と子どもをいかに生き生きと支援することができるのか、さまざまなチャレンジが望まれます。このたびニッセイ財団は「親子での地域参加の支援活動」への助成を掲げましたが、これは実に時に適った方向性と言えましょう。親も子どもともに育つというポジティブ思考で、地域に子育ての共感の輪を広げるような活動が元気よく展開されることを祈ってやみません。